特集 1 ケニア・タンザニアの今

# 新たな民族「アルガナ」の創造

## 1997年ケニア国会選挙と牧畜民ガブラ

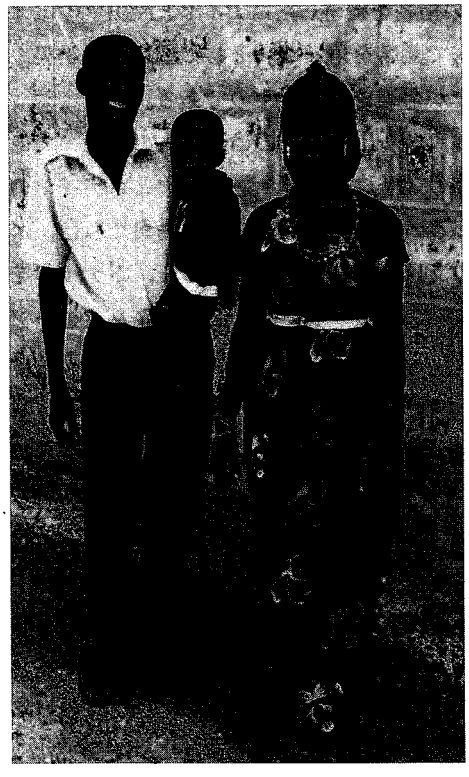
曽我　亨

### はじめに

この小論では，選挙という国家行事が，国家の周辺に位置する社会をどのように改変していったかを報告する。1997年12月，ケニアでは独立以来8度目の国会議員選挙が行なわれた。都市部では暴力的事件や紛争が生じ，連日，新聞をにぎわしたが，この選挙は，ケニアの周縁地域で牧畜を営むガブラ人の生活にも大きな影響を及ぼした。選挙，すなわち国会議席という政治的資源をめぐる争いによって，「アルガナ」という集団がガブラから離脱し，ガブラ社会は二つに分裂してしまったのである。選挙後，分裂した集団を再びひとつに統合しようとする運動が生まれ，ガブラの歴史が始まって以来「二度目」の全体会議によって，ガブラは再びひとつの集団に編成されたが，これはもはや以前のガブラ社会と同じものではなかった。選挙という国家的な行事に参加し，紛争を経験し，解決を模索するなかで，人々は自らの社会に対する自己認識を大きく変化させていったのである。それは，ケニアという国家の「外部」に位置していたガブラという文化共同体（エスニー）が，国家に組み込まれた文化・政治共同体（エスニック集団）としてのガブラに転換していく過程であった。本報告では，ガブラ分裂の引き金となったアルガナの出現に焦点をあて，この過程において人々の認識の次元に起きた変化について検討する。

### 1　政治共同体「アルガナ」の出現

選挙によって結束を強めた「アルガナ」という文化・政治共同体は，もともとガブラを構成する五つのフラトリー（phratry）の一つにすぎなかった。それが政治共同体としての性格を強めるようになったのは，1988年に選挙区が改正されてからのことである。この改正によって，マルサビット選挙区はサク選挙区とノースホール選挙区の二つの選挙区に分かれ，これにともない次のような状況の変化が生じた。



町に住むガブラの一家

もとのマルサビット選挙区にはガブラのほか，ボラナ，レンディーレ，トゥルカナ，ブルジ，サンブル，ソマリ，そしてバンツー系の人々が含まれていた。ケニアは小選挙区制をとっているが，過半数を占めるガブラは一致団結した場合のみマルサビット選挙区の議席を獲得することができたのである。けれども選挙区が改正されると，ガブラが大多数を占めるノースホール選挙区では必ず議席を獲得できるようになり，一方，サク選挙区では少数派となったガブラが議席を獲得することは難しくなった。ノースホール選挙区では，ガブラはもはや候補者の一元化を進める必要はなくなり，この議席をめぐって複数のガブラの候補者が戦うことになったのである。

改正が行なわれる前の選挙は，町に住むガブラのみが参加する行事にすぎず，原野に住み牧畜を営むガブラが投票に行くことはきわめて稀であった。ところが選挙区が改正され，複数の候補者が争うようになると，町に住む選挙運動員たちは，原野の人々の票を獲得すべく，キャンペーンに訪れるようになった。原野に住むガブラたちも徐々に選挙に行くようになり，選挙は，ガブラ全体が参加するものになっていったのである。

1988年以降，ノースホール選挙区では，アルガナ・フラトリーから毎回，候補者が立候補した。アルガナは五つのフラトリーのなかで最大の人口を擁している。それに目をつけた選挙運動員たちは，アルガナの票を獲得するために，「アルガナ人意識」を高めようとした。この意味で「アルガナ」という政治共同体は，アルガナの候補者の選挙資源として意図的に作られたものであった。

こうした状況の変化に加えて，選挙で採用された投票方式も「アルガナ」の出現に一役買うこととなった。その投票方式について簡単に述べておこう。

1997年の選挙では，まず11月27日に，各政党の候補者を決定する指名選挙が行なわれ，12月29日の総選挙で，指名を獲得した候補者たちが議席を争った。ノースホール選挙区の指名選挙は，行列方式（mlolongo：スワヒリ語）という投票方式によって行なわれた。行列方式とは，例えばAとBの二人の候補者がいる場合，Aの支持者はAの側に，Bの支持者はBの側に並び，行列を作ってその人数を数えるというものである。当然のことだが，行列方式では，誰がどの候補者に投票したか一目瞭然となってしまうことが最大の問題である。

一方，総選挙は，無記名投票（kura debe：スワヒリ語）によって行なわれるが，問題は，文字の読み書きができない有権者への対応である。そうした有権者は，誰に投票したいかを選挙管理人に告げ，選挙管理人が投票用紙に印をつけるという仕

20歳以上の識字率

| | マルサビット県 | ケニア全体 |
|---|---|---|
| 男　性 | 24.8 | 76.0 |
| 女　性 | 7.7 | 53.1 |
| | 16.1 | 64.3 |

（出所）1989 Kenya Population Censusより筆者作成。

組みになっている。ただし，選挙管理人が不正を行なわないように，各候補者の代理人がこれを見張っているから，文字を読めない人が投票する場合，各候補者は代理人を通して，その人がどの候補者に投票したかを知ることが可能になってしまうのである。とくに識字率が低い地域ではこうした弊害が大きく，全国平均に比べて著しく識字率が低いマルサビット県（表参照）では，誰がどの候補者に投票したか，ほぼ完全に候補者や運動員たちに知られてしまった。

そして，こうした投票方式のおかげで，アルガナでありながらアルガナ以外の候補者に投票した者たちは，選挙が終わると，アルガナから排除されていったのである。例えば，あるアルガナ人は，アルガナ以外の候補者に投票した者の葬式に参加しなかった。またあるアルガナ人は，彼らが自分が主催する儀礼に参加するのを拒んだ。ある者は彼らとの「婚約」を破棄し，ある者はラクダを与える約束を守らなかった。

## 2　アルガナ候補者のキャンペーン活動

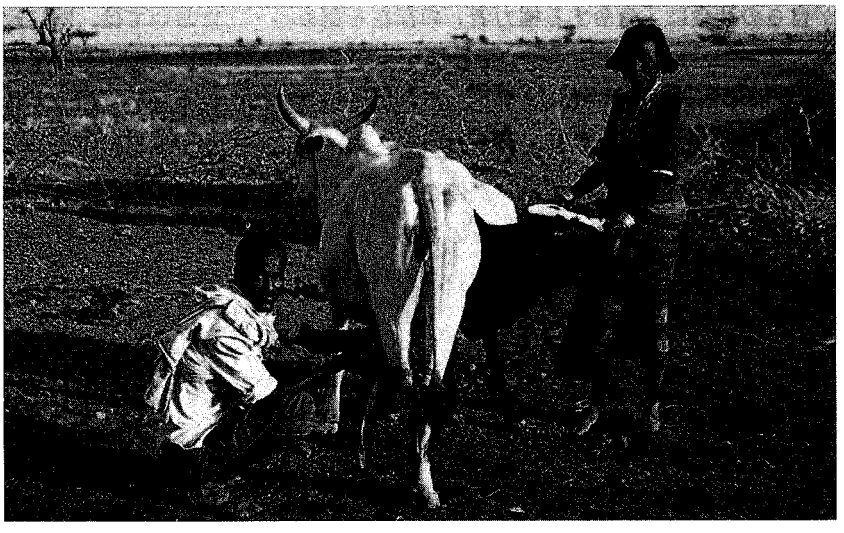
今回の国会議員選挙には，与党のKANU（ケニア・アフリカ人全国同盟）から現職のボナイヤ（Bonaiya Adi Godana）博士と新人のエレマ（Elema）が，野党のNDP（ケニア開発党）からは新人のワリオ（Wario）が立候補した。まず，KANUから出馬した二人の候補者が指名選挙を争い，続いて，KANUの指名を獲得したボナイヤとNDPのワリオが総選挙で議席を争った。そして総選挙の結果，ボナイヤが再選を果たしたのである。

アルガナから出馬したのは，新人のエレマである。今回の選挙は，事実上，エレマとボナイヤの戦いであるといわれ，エレマの運動員たちは，エレマへの支持を取り付けるかたわら，ボナイヤを支持する人々を切り崩そうと活発にキャンペーンを繰り広げた。エレマの運動員たちが，どのような戦術をもちいて原野に住むアルガナの人々に支持を訴えたのかを見ていこう。

エレマの運動員たちがとった戦術とは，ガブラの伝統を利用するということであった。町に住むガブラと原野に住むガブラとでは生活様式や物の考え方に大きな差がある。町に住むガブラが西洋風の装いを好み，ビジネスにいそしむ「近代的」な思考の持ち主であるのに対し，原野に暮らすガブラが最大の価値をおいているのは，「伝統的な」生活を送ることである。町に住むガブラは，原野に暮らすガブラを「後進的」で「原始的」な人々であると見なしており，運動員たちはガブラの伝統を利用すれば，容易に自分たちの主張を広めることができると考えたのである。

彼らは自分たちに都合の良い伝統を，その本来のコンテキストからはずし，徹底的に利用していった。まず，運動員たちは，原野のガブラに「選挙とはガブラの伝統的な戦争と同じなのだ」と語った。そして「戦争の場において，傷ついた仲間を見捨ててはならないように，われらアルガナは，アルガナの息子（すなわちエレマ）を見捨ててはならない」と，人々に訴えたのである。かくしてアルガナでありながら，エレマを支持しない者は「仲間を捨てて逃げた者」であると見なされるようになっていった。

つぎに運動員たちは，ガブラの伝統的役職者に



牧畜を営むガブラの生活

目を付けた。ガブラには各フラトリーごとに，ハユ（*hayu*）とかジャッラブ（*jarrab*）といった伝統的役職者がいる。彼らの仕事は，ガブラの平和と安寧を祈ったり，紛争を調停をしたりすることである。アルガナの運動員たちは，これに目を付け，利用することで，より支持者を増やそうとしたのである。運動員たちは，まず偽のジャッラブを作りだした。ガブラ・ランドに散らばって暮らしているジャッラブたちは，ハユからの連絡を地域の人々に伝えるという役割をもっている。運動員たちは，この偽のジャッラブに「アルガナはアルガナの候補者に投票せよとハユが言った」と人々に説明させたのである。

さらに彼らは，「ドラムの匠」という，まったく新しい役職者を誕生させた。ガブラの各フラトリーは，それぞれフラトリーを象徴するドラムを所有しているが，これらのドラムは，あるアルガナの男性によって作られていた。運動員たちはこの男性を「ドラムの匠」という新しい役職者に祭り上げ，自分たちの陣営に引き込んだのである。彼らは，「ドラムの匠」はハユよりも位が上だ，という言説を流布していった。なぜならば，このドラムがなければ，ハユは儀礼を行なったり，平和を祈願することもできないからである。運動員たちは「ドラムの匠」を権威づけるとともに，人々に「ドラムの匠」の意見に従わなければならないと説明したのである。

これらの役職者や「ドラムの匠」は，「新たな伝統」として人々に受け入れられていった。そしてエレマを支持するアルガナたちは，前述したように，ボナイヤを支持するアルガナを排除するようになっていったのである。アルガナは急速に，異なる政治的態度をとるアルガナを排除し始め，エレマを支持する政治共同体へと変貌を遂げていった。そして人々は，アルガナがガブラから分裂したと感じるようになっていったのである。

アルガナが政治共同体としての結束を深めていった過程に焦点をあて，この過程で，アルガナの人々の認識にどのような変化が生じたのかを検討していこう。

## 3 アルガナの人々に生じた認識の変化

まず，最初に指摘したいのは，この過程で人々

が自らの社会に「命令する権力者」の存在を認めるようになったということである。もともと，ガブラ社会には権力者と呼べるような者はいなかった。ハユとかジャッラブなどの役職者も，平和を祈願したり，祝福を授けたり，調停を行なうといった役割しか果たしてこなかったのである。その意味でガブラ社会は権力者のいない，いわば「無頭の社会」なのであった。

けれども，運動員たちは，このハユとかジャッラブとか，さらには「ドラムの匠」などの役職者を，命令する権力者として扱ったのであり，アルガナの人々は命令を下す権力者を受け入れていったのである。人々の認識において，アルガナ社会は，権力者のいない社会から，権力者を有する社会へと転換していったのであった。

次に，アルガナという，フラトリー・レベルの大きな分節が政治的な意味をもつようになったことが挙げられる。もともとガブラの社会生活においてフラトリーはさほど重要な意味を持っていなかった。人々が利害を争うときに結束を固めたのはむしろクランのレベルであった。アルガナでありながらボナイヤを支持した人々というのは，ボナイヤのクランと深い結びつきをもつクランの人々だったのである。彼らは，伝統的なガブラの価値基準に従った行動をとったといえる。

けれども，エレマを支持する人々は，こうした人々をアルガナから排除すると脅したり，実際に排除していった。彼らは，フラトリーを超えて結ばれたクラン同士の結束を断ち切ろうと努めたのであり，アルガナという集団の輪郭を強固なものへと変えていったのである。

さらに，その強固な輪郭をもつアルガナの内部においては，同じ政治的な態度をとるべきであるという考え方が生まれた。もともと，ガブラの日常生活で，利害を争うときに結束を強めるのはクランのレベルであったことは上述したとおりだが，そのクランにおいても，同じ政治的な態度をとらねばならない，ということはそれまでなかった。例えばクラン同士がラクダの授受をめぐって争っているときでも，クランの全員がこの争いに参加する必要はなかったし，争いを横目に親しいつきあいを続けてもかまわなかったのである。クランの他のメンバーと異なる政治的な態度をとったからといって，排除されることも当然なかった。

けれども，今回の選挙を機に，アルガナの人々は同じ政治的な態度をとらねばならないという意識が生まれたのであり，それに従わない者はアルガナから排除されるようになっていったのである。

## おわりに

以上，アルガナの人々に生じた認識の転換を3点みてきた。かくして命令する権力者を有し，均質な政治的態度をとるメンバーから成る政治共同体「アルガナ」が誕生したのである。

この後，「アルガナ」はガブラ全体会議を経て，ガブラに再統合されていくことになる。けれども，再統合されたガブラ社会は，もはや以前のガブラ社会と同じものではなかった。アルガナの人々に生じた認識の転換を，こんどはすべてのガブラの人々が全体会議の場において，経験するものとなったからである。

（そが・とおる／弘前大学）